

沖縄の障害者歯科医療

笠 原 浩

松本歯科大学 小児歯科学教室 (主任 今西孝博 教授)

Dental Treatment for Handicapped Patients in Okinawa Prefecture

HIROSHI KASAHARA

Department of Pedodontics, Matsumoto Dental College
(Chief: Prof. T. Imanishi)

Summary

This report is based on observations during my visit to Okinawa Prefecture from June 9 to June 15, 1980. I was engaged in the instruction of the dental treatment for the severely handicapped patients, in response to the request by the Welfare Ministry.

Dental treatment for the severely handicapped patients has always been very difficult. But recently, by using general anesthesia it has been able to give them adequate dental treatment. The Okinawa Dental Association started the project of the intensive dental treatment for such patients under general anesthesia with support and cooperation of Okinawa Prefecture, the Welfare Ministry, and the Japanese Dental Society of Anesthesiology.

はじめに

1980年6月9日から15日まで、厚生省委嘱による心身障害者歯科医療の技術指導医として沖縄県に出張してきた。これは沖縄県に対する国の医療援助の一環として、1979年度より開始された事業であり、第2年度である当年度は日本歯科麻酔学会の推薦にもとづいて、厚生省医務局長から松本歯科大学長宛の医発480号通牒により、私が出張を命じられたものである。

これまでの経過

社会福祉の重要性が強調され、障害者の医療要求に対する積極的対応が叫ばれるようになってきたため、沖縄県では県歯科医師会が県環境保健部の援助のもとに、1975年9月26日に同会立口腔衛生センター歯科診療所を開設し、以後約4年間に主として身体障害者ならびに精神薄弱者収容施設の入所者を対象とした歯科診療を実施してきた。この間の延べ診療人員は3,100名に達し、同会会員が当番制でこれにあたってきた。しかしながら、重度障害者では、通常の方法での歯科診療は不可

能なことが少なくなく、その対策には苦慮していた。そこで、全身麻酔下集中診療法の導入が検討され、東京医科歯科大学歯科麻酔学教室に援助が求められた。同教室では、日本歯科麻酔学会認定医に広く呼びかけて積極的協力をはかることとした。

他方、沖縄県環境保健部（長野県では衛生部に相当する）は、厚生省に働きかけ、この事業を国の沖縄県に対する医療援助の一環に組み込むことを認めさせた。また、全身麻酔のために必要な器械類は、日本自転車振興会の補助金を得て購入し、口腔衛生センター歯科診療所も改修工事を施すなど、着々と準備が整えられた。

1979年6月、麻酔担当医として東京医科歯科大学歯科麻酔学教室の瀬畑 宏助手、同指導医として同教室の久保田康耶教授が派遣され、全身麻酔下集中診療が開始された。治療は沖縄県歯科医師会員の有志が交互に担当した。

初年度は、6、9、11月および翌年2月が治療月と決定され、厚生省の公費による派遣歯科医師が麻酔担当医として各1ヵ月滞在し、この間週4回1日あたり1～2例の集中治療を行うこととなった。実績として、初年度には合計90名が治療を受けた。なお、9月以降は治療担当医も東京慈恵会医科大学歯科から派遣された。また、6月には障害者専門技術指導医として、横須賀聖ヨセフ病院歯科口腔外科の酒井信明医長（心身障害者歯科医療研究会会長）も派遣され、約1週間滞在して技術指導にあたった。

1980年度は第2年度として、ほぼ前年度と同様な事業が計画された。治療月は6、9、11月および翌年2月とされ、麻酔担当医は東京歯科大学歯科麻酔学教室から、治療担当医は東京慈恵会医科大学歯科から、それぞれ1ヵ月を単位として派遣されることとなった。また、麻酔指導医としては東京歯科大学の中久喜 喬教授が、障害者専門技術指導医としては松本歯科大学の笠原 浩が、それぞれ委嘱された。

行政の積極的姿勢

6月9日午後、那覇空港に到着後ただちに県庁に案内され、医療行政の責任者である伊波茂雄環境保健部長、ならびに新垣雄久生活福祉部長はじめ障害福祉関係者と、それぞれ懇談した。沖縄県

は第二次大戦の激戦場となって20数万の犠牲者を出し、その後も永く米軍占領下にあっただけに、県民の所得水準などを比較すれば、本土とは大きな格差があることは否めない。医療面についてもきわめて貧しく、例えば人口10万対の歯科医師数は17.2と、長野県の半分以上に過ぎない。県庁舎そのものなども、わが長野県庁とはおよそ比較にならないほどのお粗末なものである。しかし、そうした貧しさのなかでも、県民の医療と福祉の充実向上に懸命の努力を惜まない関係者の姿勢には、まことに感動させられた。私自身が長野県ですでに5年以上にわたって障害者歯科医療に奮闘していても、まだ県の衛生部長とも社会部長とも顔を合わせるところか、この問題について公式に発言する場すら与えられていないというヒガミもあるかもしれないが……。

口腔衛生センターでの集中治療

翌日は、那覇市の東に隣接する浦添市所在の口腔衛生センターで、すでに数日前に到着していた麻酔担当医の塚越完子先生、治療担当医の秋庭賢司先生とともに、早速治療を開始する。対象患者は那覇郊外の施設に入所している精神薄弱者で、当日朝に施設から自動車で来院した。麻酔はGOFのマスクによる緩徐導入後に、経鼻気管内挿管を行う。松本歯科大学病院小児歯科でも日常的に行われている方法であるが、新型の麻酔器や自動体温調節器など高額な器械が、自転車振興会の補助を得て完備していることは、全くどこからも援助のない私の立場からはうらやましいところであった。

治療内容は、初期齲蝕の充填（アマルガムまたは複合レジン）と抜歯が主体で、歯内療法はこれまでも例外的にしか行われていなかったようである。前年度の実績を見ても、90例中87例が抜歯であり、なかには一挙に26歯を抜歯したと、地方紙の見出しとなった症例もあった。口腔外科専攻の先生方のなかには、障害者の全麻下治療イコール抜歯と考える人もいようであるが、ある程度以上の障害をもった患者では、抜歯したら最後で、可撤式の義歯を使いこなすことがほとんど不可能であることを考えて、極力保存をはかるべきである。外見的には残根と思われるような歯でも、感染根管1回治療法により根充（必要があれば歯根

切除術併用)、キュラーアンカーによる支台築造、クラウンフォームまたは既製冠を応用した歯冠修復までをその場で完了させてしまうことも可能なのである。

残念ながら、そうした処置のための器材がほとんど見当らなかったのも、歯科材料商に連絡して、キュラーアンカー、クラウンフォーム、既製冠などの手配を依頼しておいた。

施設、琉球大で……

抜歯主体の治療は比較的短時間で終了したので、午後は障害者施設を訪問することとした。那覇市の南の郊外の東風平村のサトウキビ畑のなかにある「あけもどろ学園」と「てだこ学園」で、どちらも精神薄弱者更生施設である。園芸作業や焼物、ブロック作りなど明るい陽光のもとで汗を流し、生き生きと活動している入所者の明るさが印象的であった。持参のスライドを職員の皆さんにご覧に入れ、重度障害者の歯みがき法の実演なども含めて、1時間半にわたってお話した。突然の訪問であったが、熱心な質問が続出し、高い関心を示していただいた。

水曜日も2例の集中治療で、いずれも成人の精薄者であった。うち1例を私が完全に担当し、ほとんど残根状態に近い上顎前歯の歯内療法と修復を実演してみせた。ただし、抜歯とは比較にならないほど時間がかかるのが難点で、前歯ならばまだしも大臼歯では、3～4根管を完全に拡大・加圧根充して、支台築造し、既製冠を装着するまでには、熟練者でも1時間近くかかる。松本歯大病院のように入院が前提であれば、6～8時間かかって別な差支えはないが、沖縄の口腔衛生センターでは、入院設備はないから、時間的制約は当然考えなければならない。緊急時には、県立中部病院などが受け入れてくれる手筈とはなっているが、いわゆる外来全麻の限界は、より重度の障害者の受け入れとともに今後の課題であろう。

この日の午後は、かねての打ち合わせどおりに琉球大学付属病院歯科口腔外科を訪問する。主任の山城正宏助教授は私の東医歯大での同級生で、医学部設置に伴って教授昇任が予定されている。保健学部1小診療科に過ぎない現状では、チェアー3台のささやかなクリニックでしかないが、兎唇口蓋裂や腫瘍などの手術症例も多く、沖縄県

の歯科医療の中核として大いに発展することが期待されている。教室員やOBが多数集ってくれたところで、小児や障害者の行動管理について講演した後、沖縄料理のご馳走にあずかった。

木曜日も午前中は治療、やはり成人の精薄者で、治療終了後は隣室のベッドで完全覚醒を待ってから再び自動車に乘せて帰すのだが、万全を期すために麻酔担当医は施設まで同乗していく。ご苦労さまなことである。夕刻は那覇市波の上の「8月15夜の茶屋」で有名な料亭で県当局が一席設けてくださる。琉球舞踊のすばらしさに堪能した。

衛生士学院、歯科医師会で……

金曜日は治療は1例のみであった。午後は沖縄歯科衛生士学院で講義させていただく。1週間しかないのだから精一杯活動しておきたいと、特にお願いしてお許しを頂戴したもので、小児や障害者の取扱いには、アシスタントの役割がきわめて重要なのである。夕刻は県歯科医師会の招宴で、出張中の玉城信徳会長に代わって、比嘉良有副会長はじめ多くの先生方から丁寧な挨拶を頂戴した。全会員がひとり残らず障害者診療に参加されるなど、県歯あげでの積極的な姿勢にはまことに頭が下がる思いである。

土曜日は治療はお休み。先生方に誘われるままに、ムーンビーチの亜熱帯の海の美しさを満喫した。ただし、夕刻からは最後の仕事として、歯科医師会員の先生方に「障害者と歯の健康」と題した講演をさせていただく。百数十枚のスライドをご覧に入れた。次から次にと質問が出て、ご希望に応じて「能率的小児歯科治療」のVTRも見ていただくなど、夜10時過ぎまで話が尽きず、先生方の熱意には疲れも忘れるほどであった。

戦跡に思う

日曜日は、かつての級友の山城正宏先生のご好意で、南部戦跡を案内していただいた。一般住民を巻き添えにした帝国陸軍の無謀な戦闘、そして孫子の「囲師は周するなかれ」のワナにまんまとはまったかのような拙劣さよまる司令官の指揮にはあきれかえるほどで、二度とこのような愚かで自分勝手な連中に国をまかせてはならないと思った。数倍の大敵に出血を強要した首里攻防戦までは評価できるにしても、南部の洞窟へ逃げこんで

からはおよそ戦争といえるようなものではない。
女子どもを含めた一般住民が避難していた洞窟
に、後から軍隊が逃げこんできて、住民を追い出
したり、ときには自ら殺害したりまでしていたの

である。

ジャンボ機に搭乗すれば羽田まではわずかに 1
時間余、東京～松本の方が時間的にははるかに遠
かった。